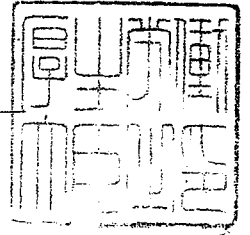


厚生労働省発食安第0918001号
平成 20 年 9 月 18 日

薬事・食品衛生審議会
会長 望月 正隆 殿

厚生労働大臣 舩添 要



諮 問 書

食品衛生法（昭和22年法律第233号）第11条第1項の規定に基づき、下記の事項について、貴会の意見を求めます。

記

次に掲げる農薬の食品中の残留基準設定について

クロチアニジン

平成20年12月18日

薬事・食品衛生審議会
食品衛生分科会長 吉倉 廣 殿

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会
農薬・動物用医薬品部会長 大野 泰雄

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会
農薬・動物用医薬品部会報告について

平成20年9月18日厚生労働省発食安第0918001号をもって諮問された、食品衛生法（昭和22年法律第233号）第11条第1項の規定に基づくクロチアニジンに係る食品規格（食品中の農薬の残留基準）の設定について、当部会で審議を行った結果を別添のとおり取りまとめたので、これを報告する。

(別添)

クロチアニジン

1. 品目名：クロチアニジン (clothianidin)

2. 用途：殺虫剤

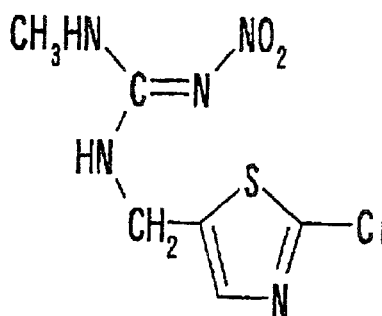
ネオニコチノイド系殺虫剤である。作用機序は、主にニコチン性アセチルコリン受容体アゴニスト作用によるものと考えられる。

3. 化学名：

(*E*)-1-(2-chloro-1,3-thiazol-5-ylmethyl)-3-methyl-2-nitroguanidine (IUPAC)

[*C* (*E*)]-*N*-[(2-chloro-5-thiazolyl)methyl]-*N'*-methyl-*N''*-nitroguanidine (CAS)

4. 構造式及び物性



分子式	C ₆ H ₈ ClN ₅ O ₂ S
分子量	249.68
水溶解度	0.327 g/L (20°C)
分配係数	logPow = 0.7 (25°C)

(メーカー提出資料より)

5. 適用病害虫の範囲及び使用方法

本薬の適用病害虫の範囲及び使用方法は以下のとおり。

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲	ウカ類 ツマグロヨコバイ カメシ類 イネノオイムシ	4000倍	60～150 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は1回以内、 本田では3回以内)
	ウカ類 カメシ類 イネノオイムシ	1000倍	25L/10a				
稲 (箱育苗)	ウカ類 ツマグロヨコバイ フタヒコヤカ	200倍	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当たり 500mL	移植3日前～ 移植当日	1回	育苗箱の上から均一に散布する	
	イネノオイムシ イネミスゾウムシ	200～ 400倍					
きゅうり	ミナキイロアザミウマ アブラムシ類 コシジラミ類	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫前日まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は3回以内)
メロン	アブラムシ類	4000倍					
	コシジラミ類 ミナキイロアザミウマ	2000～ 4000倍					
	トマトハモクリハエ	2000倍					
すいか	アブラムシ類	4000倍	2000倍				4回以内 (定植時の土壌混和は1回以内、散布は3回以内)
	ミナキイロアザミウマ ウリハムシ						

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数				
なす	ミキイロアザミウマ ハモグリバエ類	2000倍	100～300 L/10a	収穫前日まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は3回以内)				
	アブラムシ類 マハモグリバエ コナジラミ類	2000～ 4000倍									
トマト ミニトマト	アブラムシ類 コナジラミ類	2000倍						3回以内	4回以内 (鉢上時の株元処理、育苗期後半の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は3回以内)		
	ハモグリバエ類										
ピーマン	アブラムシ類 コナジラミ類	2000～ 4000倍								2回以内	3回以内 (育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内)
	ミキイロアザミウマ	2000倍									
だいこん	アブラムシ類	2000～ 4000倍			収穫7日前まで		3回以内 (は種時の土壌混和は1回以内、は種後は2回以内)				
レタス	ハモグリバエ	2000倍			3回以内 (育苗期の株元処理は1回以内、散布は2回以内)						
キャベツ	アブラムシ類	2000～ 4000倍			収穫3日前まで		3回以内 (は種時の散布、育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内)				
	アオムシ コガネ	2000倍									

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数	
ねぎ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫3日前まで	4回以内	散布	4回以内 (植付時の植溝処理は1回以内、株元散布は2回以内)	
ばれいしょ	アブラムシ類	4000倍	25L/10a	収穫7日前まで	3回以内		4回以内 (植付時の土壌混和は1回以内、植付後は3回以内)	
	テントウムシダマシ類	1000倍					4回以内 (定植前の苗床灌注は1回以内、散布は3回以内)	
てんさい	カメノコハムシ テントウムシダマシ アブラムシ類	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫14日前まで	1回	苗床灌注	4回以内 (定植前の苗床灌注は1回以内、散布は3回以内)	
	テントウムシダマシ テントウムシダマシ カメノコハムシ	100～ 200倍	1L/ハート ポット1冊 (3L/m ²)	定植前				
豆類 (種実、ただし、だいず、らっかせいを除く)	アブラムシ類	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内	
だいず	マシクイバ	2000倍						
	アブラムシ類 カメノコハムシ フタスジヒメハムシ							
かぼちゃ	アブラムシ類	2000～ 4000倍						収穫3日前まで
にがうり	シメキイロアザミウマ							収穫前日まで
テンゲンサイ	アブラムシ類		収穫14日前まで					

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
みょうが (花穂)	ナス科カイガラムシ	2000 倍	100～300 L/10a	収穫前日 まで	3回以内	散布、但し 花穂の発生期には マルチ被覆により 散布液が直接 花穂に飛散 しない状態 で使用する	3回以内
みょうが (茎葉)				みょうが (花穂) の収穫前日まで 但し、花穂を収穫 しない場合にあっては 開花期終了まで			
みずな	アブラムシ類	2000～ 4000 倍		収穫 7 日前 まで			
オクラ				収穫前日 まで			
れんこん	クワイビレアブラムシ			収穫 7 日前 まで			
えだまめ	アブラムシ類 カメムシ類						
ブロッコリー	アオムシ	2000 倍	収穫 3 日前 まで				4回以内 (は種時の 散布、育苗期 の株元処理 及び定植時 の植穴処理 土壌混和は 合計 1 回以内、 散布は 3 回以内)
	アブラムシ類	2000～ 4000 倍					
にら	ネギアザシマ アブラムシ類						3回以内

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
非結球レタス	アブラムシ類	2000～4000倍	100～300 L/10a	収穫3日前まで	2回以内		3回以内 (育苗期の株元処理は1回以内、散布は2回以内)
	ナメクジハエ	2000倍					
アスパラガス	アブラムシ類 ネキアザミウマ ジョウネウガハムシ	2000～4000倍	200～700 L/10a	収穫前日まで	3回以内	散布	3回以内
りんご	カメムシ類 キンモンホリガ キンモンハメクジリガ シクイムシ類 アブラムシ類 コカイヤラムシ類 リンゴワタムシ ケムシ類			収穫前日まで			
なし	シクイムシ類 アブラムシ類 コカイヤラムシ類 カメムシ類 ケムシ類			収穫前日まで			
すもも	アブラムシ類	4000倍		収穫3日前まで			
もも	アブラムシ類 モモハメクジリガ シクイムシ類 カメムシ類	2000～4000倍		収穫7日前まで			
	コガネムシ類	2000倍					

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数	
おうとう	オウトウシヨウジ ヨウバエ カメシ類	2000 倍		収穫前日 まで	2 回以内		2 回以内	
うめ	ケムシ類 アブラムシ類 カメシ類	2000～		収穫 7 日前 まで	3 回以内		散布	3 回以内
	ぶどう	コナカイガラムシ類 チャノキイロアザミウマ フタテンヒメヨコバイ		4000 倍				
かんきつ (みかんを 除く)	ミカンバエ ミカンキジラミ	2000 倍	200～700 L/10a	収穫 7 日前 まで		3 回以内		
	みかん	アブラムシ類 ミカンハモグリガ アザミウマ類 ケシキスイ類 コオハナムケリ ツノロウシ コナカイガラムシ類 ゴマダラカミキリ カメシ類 アゲハ類 アカマカカイガラムシ			2000～ 4000 倍		100mL/樹 10～ 100mL/樹	収穫 150 日 前まで
		ミカンバエ ミカンキジラミ	2000 倍					
かんきつ (苗木)		ミカンハモグリガ ゴマダラカミキリ	20 倍	100mL/樹	収穫 150 日 前まで	1 回		
かき	カキヒメヨコバイ	4000 倍	200～700 L/10a	収穫 7 日前 まで	3 回以内	散布		
	チャノキイロアザミウマ カキクダアザミウマ コナカイガラムシ類 カキノハタムシガ カメシ類	2000～ 4000 倍						

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
マンゴー	アザミウマ類 コナカイラムシ類	2000～ 4000 倍	200～700 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内
いちじく	アザミウマ類			収穫3日前まで			
ネクタリン	アブラムシ類 モモハモグリガ シクイムシ類 カメムシ類	2000 倍	収穫3日前まで				
	コガネムシ類						
あんず	アブラムシ類	4000 倍	100～300 L/10a	収穫前日まで			
とうがん	シメキイロアザミウマ	2000 倍					
食用へちま	アブラムシ類			収穫3日前まで			
パパイヤ	ナガカタカイラムシ ヒラタカタカイラムシ	200～700 L/10a	収穫3日前まで	1回	1回		
茶	チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコハイ チャノホソカ	2000～ 4000 倍	200～400 L/10a			摘採7日前まで	
	コミカンアブラムシ	4000 倍					

(2) 1.0%クロチアニジン1キロ粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲	ウンカ類 ツマグロヨコバイ	1kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	4回以内 (但し本田期は3回以内)

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数	
稲	ウンカ類 ツマグロヨコバイ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内)	
	カメムシ類	3~4kg/10a					
稲 (箱育苗)	イネノオヒムシ イネシロアザミ	育苗箱 (30×60×3 cm、 使用土壌約5L) 1箱当り50g	移植3日前 ~ 移植当日	1回	育苗箱の 苗の上から均一に 散布する	4回以内 (育苗期の株元 処理及び定植時 の土壌混和は合 計1回以内、散布 は3回以内)	
きゅうり	コジラミ類 アブラムシ類 シメキイロアザミ	1g/株	育苗期後半		株元処理		
	コジラミ類	1~2g/株	定植時		植穴処理 土壌混和		
	アブラムシ類	1~2g/株					
	シメキイロアザミ	2g/株					
すいか	アブラムシ類 シメキイロアザミ	1~2g/株	定植時		株元処理		4回以内 (定植時の土壌 混和は1回以内、 散布は3回以内)
メロン	アブラムシ類 コジラミ類	1g/株	育苗期後半		株元処理		4回以内 (育苗期の株元 処理及び定植時 の土壌混和は合 計1回以内、散布 は3回以内)
	コジラミ類	1~2g/株	定植時		植穴処理 土壌混和		
	アブラムシ類						
	シメキイロアザミ トマトハモグリバエ	2g/株					

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
なす	アブラムシ類 コナジラミ類	1g/株	育苗期後半	1回	株元処理	4回以内 (育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は3回以内)
	アブラムシ類 マハモクグリハエ コナジラミ類		定植時		植穴処理 土壌混和	
トマト ミニトマト		1~2g/株			株元処理	4回以内 (鉢上時の株元処理、育苗期後半の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は3回以内)
	アブラムシ類 コナジラミ類	1g/株	育苗期後半 鉢上時		株元処理	
	トマトハモクグリハエ	2g/株	定植時		植穴処理 土壌混和	
だいこん	アブラムシ類	3~6kg/10a	は種時		播溝処理 土壌混和	3回以内 (は種時の土壌混和は1回以内、は種後は2回以内)
レタス		0.5g/株	育苗期後半		株元処理	3回以内 (育苗期の株元処理は1回以内、散布は2回以内)
非結球レタス						
キャベツ	アブラムシ類 ハイマダラノメイガ	0.25g/株	は種時		覆土後セル 成型育苗トレイの上から 散布する	3回以内 (は種時の散布、育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内)
	ネリムシ類 コガ アオムシ ハイマダラノメイガ	0.5g/株	育苗期後半		株元処理	
	アブラムシ類	1g/株	定植時	植穴処理 土壌混和		
	ハイマダラノメイガ	1~2g/株				
	コガ アオムシ	2g/株				

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
ブロッコリー	アブラムシ類 ハイダグラノメカ	0.25g/株	は種時	1回	覆土後セル 成型育苗トレイ の上から 散布する	4回以内 (は種時の散布、 育苗期後半の株 元処理及び定植 時の土壌混和は 合計1回以内、散 布は3回以内)
	コナガ アオムシ アブラムシ類	0.5g/株	育苗期後半		株元処理	
	アブラムシ類	1g/株	定植時		植穴処理 土壌混和	
	コナガ アオムシ	2g/株				
ねぎ (露地栽培)	ネギアザミマ ネギハモグリハエ	6kg/10a	植付時	2回以内	植溝処理 土壌混和	4回以内 (植付時の植溝 処理は1回以内、 株元散布は 2回以内)
		3~6kg/10a	収穫21日前 まで		株元散布	
ばれいしょ	アブラムシ類	6kg/10a	植付時	1回	植溝処理 土壌混和	4回以内 (植付時の土壌 混和は1回以内、 植付後は3回以内)
かんしょ	コガネムシ類				作条処理 土壌混和	1回
	アブラムシ類		育苗期		株元処理	
ピーマン	アブラムシ類	1g/株	育苗期後半	1回	株元処理	3回以内 (育苗期の株元 処理及び定植時 の土壌混和は合 計1回以内、散 布は2回以内)
いちご			定植時		植穴処理 土壌混和	

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
かんきつ (苗圃)	ミカンハモグリガ	10~20g/樹	育苗期	3回以内	株元散布	3回以内
げっきつ	ミカンキジラミ	30~40g/株	発生初期	4回以内	生育期 株元処理	4回以内
さとうきび	ハガハシ類	4~6kg/10a	植付時	1回	植溝処理 土壌混和	1回
れんこん	クワイビレアブラムシ	6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	湛水散布	3回以内
わけぎ (露地栽培) あさつき (露地栽培)	ネギアサシマ ネギハモグリハエ	3~6kg/10a	収穫21日前まで	2回以内	株元散布	2回以内

(4) 0.15%クロチアニジン粉剤 DL

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲	ウンカ類 ツマクロコハエ カメシ類	3~4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は 1回以内、本田では 3回以内)
	イナゴ類	4kg/10a				
	イネトオイムシ フタオヒコヤカ	3kg/10a				
だいず	アブラムシ類 カメシ類 フラスジヒメハシ	4kg/10a	収穫7日前まで			3回以内

(5) 1.5%クロチアニジン箱粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲 (箱育苗)	ウンカ類 ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ イネトオイムシ ニカメイトユウ フタホトコヤガ イネヒメモグリハエ	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当り50g	移植3日前 ～ 移植当日	1回	育苗箱の上から均一に散布する。	4回以内 (育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内)

(6) 0.50%クロチアニジンH粉剤DL

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲	カメムシ類 ウンカ類 ツマグロヨコバイ イナゴ類 イネトムシ ニカメイトユウ フタホトコヤガ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内)
	イネトオイムシ	3kg/10a				
だいず	マメシクイガ	4kg/10a	収穫7日前まで			3回以内
	アブラムシ類 カメムシ類 フタスジヒメムシ	3～4kg/10a				

(7) 20.0%クロチアニジン水和剤 (フロアブル)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲	付コ [○] 類 ウカ類 ツマグ [○] ロヨコバ [○] イ カメムシ類	5000 倍	60~150 L/10a	収穫 14 日前 まで	3 回以内	散布	4 回以内 (育苗箱散布 は 1 回以内、 本田では 3 回 以内)
	ウカ類 ツマグ [○] ロヨコバ [○] イ カメムシ類	90 倍	3L/10a			空中散布	
	ウカ類 カメムシ類	24 倍	800mL/10a			無人ヘリコプタ ーによる 散布	
		1250 倍	25L/10a			散布	
だいず	アブラムシ類 カメムシ類 マメシクイガ [○]	2500~ 5000 倍	100~300 L/10a	収穫 7 日前 まで	3 回以内	散布	3 回以内
	アブラムシ類 カメムシ類	24 倍	800mL/10a	無人ヘリコ プターによ る散布			
ばれいしょ	アブラムシ類	5000 倍	100~300 L/10a	収穫 7 日前 まで		散布	4 回以内 (植付時の土 壌混和は 1 回 以内、植付後 では 3 回以内)

6. 作物残留試験結果

(1) 分析の概要

① 分析対象の化合物

- ・ クロチアニジン

② 分析法の概要

試料をアセトンで抽出し、多孔性ケイソウ土カラム、中性アルミナミニカラム及びシリカカートリッジで精製した後、高速液体クロマトグラフにより定量する。

定量限界 0.002~0.05ppm。

(2) 作物残留試験結果

① 稲

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後13^{注2)}~28日の最大残留量^{注1)}は0.134, 0.104 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。^{注3)}

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び1.0%1キロ粒剤を計3回散布（1kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}~28日の最大残留量は<0.004, 0.026 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.15%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}~28日の最大残留量は0.048, 0.023 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14~22日の最大残留量は0.02, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.07, 0.09 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液

を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、並びに16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布(150L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.14, 0.12 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(玄米)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、並びに0.5%粒剤を計3回散布(4kg/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.01, 0.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(玄米)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、並びに20.0%フロアブルの5,000倍希釈液を計3回散布(150L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.12, 0.13 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(玄米)を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、並びに20.0%フロアブルの24倍希釈液を計3又は4回RCH散布(0.8L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.04, 0.16, 0.16 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(玄米)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、並びに16.0%水溶液の1,000倍希釈液を3回散布(25L/10a)したところ、散布後7~28日の最大残留量は0.10, 0.07 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(玄米)を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱及び20%フロアブル剤の1250倍希釈液を3回散布(25L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.15, 0.21 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(稲わら)を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、及び16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布(150L/10a)したところ、散布後13^{註2)}~28日の最大残留量は0.11, 0.132 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲(稲わら)を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱(移植当日育苗施用)、及び1.0%キロ粒剤を計3回散布(1kg/10a)したところ、散布後13^{註2)}~28日の最大残留量は0.118, 0.176 ppmであった。ただし、この試験

は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.15%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}～28日の最大残留量は0.12, 0.142 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～22日の最大残留量は0.72, 0.26 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.28, 2.75 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.18, 0.78 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.17, 2.16 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに20.0%フロアブルの5,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.12, 1.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに20.0%フロアブルの24倍希釈液を計3又は4回RCH散布（0.8L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.81, 2.57, 2.28 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに16.0%水溶剤の1,000倍希釈液を3回散布（25L/10a）したところ、散布後7～28日の最大残留量は1.47, 0.79 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験（2例）において、2.5%箱粒剤を50g/箱及び20%フロアブル剤の1250倍希釈液を計4回散布（25L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.40, 3.51 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

②だいず

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（150, 200L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び0.5%H粉剤DLを計4回又は3回散布（4kg/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は<0.01, <0.01^{註4} ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び20.0%フロアブルの2,500倍希釈液を計3回散布（200, 250L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び20.0%フロアブルの20～24倍希釈液を計4回散布（0.8L/10a）したところ、散布後7～28日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

③ばれいしょ

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種前播種溝処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.002, 0.016 ppmであった。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（植付時植溝処理土壌混和）、及び20.0%フロアブルの2,500倍希釈液を計3回散

布 (200, 250L/10a) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は <0.01 , 0.01 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

ばれいしょ (塊茎) を用いた作物残留試験 (2 例) において、 0.5% 粒剤を $6\text{kg}/10\text{a}$ (植付時植溝処理土壌混和)、及び 16.0% 水溶剤の $1,000$ 倍希釈液を計 3 回散布 ($25\text{L}/10\text{a}$) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 0.03 , <0.01 ppm であった。

④かんしょ

かんしょ (塊根) を用いた作物残留試験 (2 例) において、 0.5% 粒剤を $9\text{kg}/10\text{a}$ 、定植時作条処理土壌混和として 1 回用いたところ、散布後 104~116 日の最大残留量は <0.01 , <0.01 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑤てんさい

てんさい (根部) を用いた作物残留試験 (2 例) において、 16.0% 水溶剤の 100 倍希釈液を計 1 回定植時苗床灌注 ($1\text{L}/\text{冊}$) したところ、散布後 160~175 日の最大残留量は <0.01 , <0.01 ppm であった。

てんさい (根部) を用いた作物残留試験 (2 例) において、 20.0% フロアブルの原液を 1 回種子コーティング ($489\text{mL}/100,000$ ペレット種子)、 16.0% 水溶剤の 100 倍希釈液を 1 回定植前苗床灌注 ($1\text{L}/\text{冊}$) 及び 2000 倍希釈液を 3 回散布 ($200, 500\text{L}/10\text{a}$) したところ、散布後 14~30 日の最大残留量は <0.01 , 0.02 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑥だいこん

だいこん (根部) を用いた作物残留試験 (2 例) において、 0.5% 粒剤を $6\text{kg}/10\text{a}$ (播種前播種溝処理土壌混和)、及び 16.0% 水溶剤の $2,000$ 倍希釈液を計 2 回散布 ($150, 200\text{L}/10\text{a}$) したところ、散布後 7~14 日の最大残留量は 0.016 , 0.014 ppm であった。

だいこん (葉部) を用いた作物残留試験 (2 例) において、 0.5% 粒剤を $6\text{kg}/10\text{a}$ (播種前播種溝処理土壌混和)、及び 16.0% 水溶剤の $2,000$ 倍希釈液を計 2 回散布 ($150, 200\text{L}/10\text{a}$) したところ、散布後 7~14 日の最大残留量は 0.84 , 2.26 ppm であった。

だいこん (つまみ菜) を用いた作物残留試験 (1 例) において、 0.5% 粒剤を $6\text{kg}/10\text{a}$ (播種前播種溝処理土壌混和) したところ、散布後 10 日の最大残留量は 0.48 ppm であった。

だいこん(間引き菜)を用いた作物残留試験(1例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種前播種溝処理土壌混和)したところ、散布後22日の最大残留量は0.14ppmであった。

⑦キャベツ

キャベツ(葉球)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株(定植時植穴処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(200, 300L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.18, 0.16ppmであった。

⑧レタス

レタス(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株(定植時植穴処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(200, 300L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.58, 1.33ppmであった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。

⑨ねぎ

ねぎ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a、定植時植溝処理土壌混和として1回、株元散布として4回散布したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.05, 0.14ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ねぎ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を1回播種前播種溝処理土壌混和(6kg/10a)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を4回散布(200, 150L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.09, 0.13ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑩トマト

トマト(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株(定植時植穴処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(250L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.226, 0.120ppmであった。

⑪ピーマン

ピーマン(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株(定植時植穴処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(200, 150~200L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は1.21, 1.02ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑫なす

なす(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株(定植時植穴処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(162.5

~200, 200L/10a) したところ、散布後 1~7 日の最大残留量は 0.290, 0.379 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑬きゅうり

きゅうり (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、0.5% 粒剤を 2g/株 (定植時植穴処理土壌混和)、及び 16.0% 水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 3 回散布 (300, 200L/10a) したところ、散布後 1~7 日の最大残留量は 0.695, 0.224 ppm であった。

⑭メロン

メロン (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、0.5% 粒剤を 2g/株 (定植時植穴処理土壌混和)、及び 16.0% 水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 3 回散布 (250, 300L/10a) したところ、散布後 1~7 日の最大残留量は 0.038, 0.012 ppm であった。

⑮すいか

すいか (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、0.5% 粒剤を 2 g/株 (定植時植穴処理土壌混和)、及び 16.0% 水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 3 回散布 (250, 300L/10a) したところ、散布後 1~7 日の最大残留量は 0.022, 0.011 ppm であった。

⑯温州みかん

温州みかん (果肉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、16.0% 水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 3 回散布 (400L/10a) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 0.246, 0.086 ppm であった。

温州みかん (果皮) を用いた作物残留試験 (2 例) において、16.0% 水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 3 回散布 (400L/10a) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 3.24, 1.09 ppm であった。

温州みかん (果肉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、16.0% 水溶剤の 20 倍希釈液を 1 回樹幹散布 (22.2, 13.3L/10a) 及び 2000 倍希釈液を計 3 回散布 (666, 800L/10a) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 0.02, 0.08 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

温州みかん (果皮) を用いた作物残留試験 (2 例) において、16.0% 水溶剤の 20 倍希釈液を 1 回樹幹散布 (22.2, 13.3L/10a) 及び 2000 倍希釈液を計 3 回散布 (666, 800L/10a) したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 0.74, 2.96 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑰なつみかん

なつみかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.023, 0.292 ppmであった。

なつみかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.362, 2.18 ppmであった。

なつみかん（果実）^{註5)}を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.118, 0.726 ppmであった。

⑱すだち

すだち（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.297 ppmであった。

⑲かぼす

かぼす（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.204 ppmであった。

⑳りんご

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.155, 0.042 ppmであった。

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（350, 400L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.15, 0.06 ppmであった。

㉑なし

なし（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（300, 500L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.39, 0.18ppmであった。

㉒もも

もも（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（400L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.124,

0.084 ppm であった。

もも（果皮）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は1.00, 2.04 ppm であった。

㉓ うめ

うめ（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(700, 500~800L/10a)したところ、散布後7~28日の最大残留量は0.97, 1.12 ppm であった。なお、500~800L/10a 散布された1例については、適用範囲内で試験が行われていない。

㉔ おうとう

おうとう（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(625, 500L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は1.08, 1.96 ppm であった。

㉕ ぶどう

ぶどう（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300L/10a)したところ、散布後14~56日の最大残留量は0.506(大粒種), 1.43(小粒種) ppm であった。

ぶどう（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300L/10a, 400L/10a)したところ、散布後1~56日の最大残留量は0.66, 1.00 ppm であった。

㉖ かき

かき（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400, 500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.11, 0.14 ppm であった。

㉗ 茶

茶（荒茶）を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計1回散布(400L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は37.6, 2.42, 9.92 ppm であった。

茶（浸出液）を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計1回散布(400L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は36.4, 2.27, 8.70 ppm であった。